

経済史Ⅰ 受講者諸君にふたたびひとこと

—成績評価とレポートについて—

2017年12月6日
小野塚 知 二

I 本講義の成績評価

成績は学期末の試験で評価します。試験は論述問題を複数出題し、そのうち何問か選択して解答してもらいます。講義に出席してノートを取るだけでなく、参考文献を用いた自習が必要なことは他の講義と同様です。

経済史の試験答案の中には溜息しかでないほど情けないものがあります。講義には十分な準備をして平明さを心掛けています。しかも、小野塚・岡崎ともにお釈迦様から認定がもらえるほどの筋金入りの仏であるにもかかわらず、情けない結果を見せられるのは本当に残念です。この講義では小難しいカタカナ語や数式は多用しませんが、そのためかえって自らの理解度を認識するのが難しいのかもしれませんが。講義が平明ではあっても、出席と自習を怠れば成績は低くなり、単位も覚束ないこととなります。宿題等で自らの理解度を確かめる機会は設けていますが、それでも己を知らず無謀に期末試験に挑み玉砕する諸君が後を絶ちません。シケプリ頼みはしばしば地獄への道となります。

そこで、自主的に学習する機会として、小野塚の担当分について、テーマが自由で提出が任意のレポートを受け付けます。関心のあるテーマを定めて、いろいろ読み、考え、書き、さらに読んだり、書いたりすることをお勧めします。書いたものは一定の要件さえ整えれば、レポートになるから提出するとよいでしょう。

II 本講義のレポートについて

大学は義務教育の場ではないので、強制的要素はできる限り避けて、諸君の自学自修を助けることを本旨としたいとかがえています。講義も、極論すれば、そのための一つの「きっかけ」にすぎません。講義内容をいかに入念に準備しても、教員が講義で全てを話し尽くすのは到底不可能です。一学期たかだか90分×28回程の講義で、その科目について学生に伝授すべき全てを尽くすことができたら、それは神業であり、教師の業ではありません。自分は現にそうしているという教員が、もしいるなら、その講義内容がよほど貧弱か、学生への期待水準が低いか、あるいは教員の自己認識が欠けているか、いずれかでしょう。また、講義を聴くだけで講義内容を完全に修得することも無理です。つまり、私としては講義をしてしまえば、後は学生諸君の自習に期待するほかないのです。しかし、ただ期待するだけでは心許ないし、無責任の誹りを免れません。したがって、教員が講義時間以外に指導し、学生が講義を超えて学習するということがあるべきなのですが、それは個別的な方法に頼らざるをえません。テーマ自由・提出任意のレポートはそのための一つの方法です。

次のいずれかにあてはまると思う人はレポートを書いて提出すると良いでしょう。

A：些かなりとも経済思想史に興味を覚えた。⇒こういう人は、自分の関心に即して読み、調べ、考えたことをレポートにまとめてみましょう。ただ読むだけ、あるいは考えるだけに比べて、自分で書くと理解も深まり、考えもはるかに明晰になります。歴史は一般的な理論や法則だけでなく、個性記述も尊重しますが、この講義は時間の制約もあってしばしば前者に傾くので、諸君には自習で後者—具体的な過去の事実—を学んでほしいです。そうした自習の延長上で、専門書や学術論文に手を出すということがあってもよいし、そこまで勉強したならせっかくだから何か書くことを勧めます。

B：どうしても単位がほしいが、期末試験だけでは不安だ。⇒勉強してレポートを出しなさい。ただし、毎回の出席や自習を怠ってもレポートだけで単位が取れるわけではありません。レポートは護符にあらず。

必要な単位を取得するためにやむなく経済思想史を受講しているという諸君もいるでしょう。大学が制度として卒業要件を定め、一定の単位取得を求めている以上、受講科目全てに意欲的であればとていもいえませんが、やむなく受講する科目があるのは少しも不思議ではないし、そこには何の不都合もありません。しかし、自分で読み、考えてみると、きっと、おもしろいということがわかるはずです。

私は、本当は卒業要件は語学・体育・演習・卒論だけにすべきで、他の講義科目の履修を単位制度で縛るのは望ましくないと考えています。講義はいくつかの基礎的なものを除けば、他学科・他学部のものも含めて諸君が好きなように受講すれば良いので、試験などで成績評価をするにしても、単位を付与する必要はないし、付与すべきではありません。「単位のために履修する」ことになってしまうからです。それに諸君が何をどのように学習してき

たかは卒論の審査を慎重かつ厳格に行えばほぼ確実にわかります。「良い成績」でたくさん単位を揃えても、ろくでもない卒論を書かれたのでは悲しくなるものです。

むろん、高等教育は一定の水準を満たさなければならないから単位や成績評価は必要ですが、それらは学習によって一定の水準を満たした結果を表現するものであって、大学本来の目的ではありません。この点では譲れない一線があり、それを譲ってしまったら大学は自らを否定することになります。他方、受講した以上、単位(あるいは高い成績)が欲しいでしょうし、私としてもなるべく単位(あるいは高い成績)を与えたいのです。この点では学生と教員の利害は一致します。譲れない一線と一致する利害とを調和させるには、単位や成績に「保険」を掛ければ良いでしょう。レポートはよほど奇抜なテーマで書かない限り、期末試験の答案練習になりますし、また期末試験の成績が不良の場合は若干の「下駄を履かせる」効果をもちますから保険としても役に立つでしょう。レポートを保険と考えるなら諸種の社会保険のように加入(レポート提出)を強制することも可能ですが、単位や成績は生命・生活に直接関わる問題ではないので、強制して貴重な労力と時間を奪うことは避けることにします。

III レポートの加点効果について

期末試験(2018年2月)の前日までにレポートを提出し、かつ返却されるために受け取りに来た場合は加点効果を期待するものと見なし、1本につき9点以内で加点します。提出されたレポートの中には諸資源と私の時間を浪費するだけのしろものもあり、マイナスの点を付けたくなくすからありますから、粗製濫造や他科目のレポートの流用は慎んでください。因みに、これまでに私の担当した科目では、履修登録した者の5~36%が、一人当たり1~3本のレポートを出しました。レポート提出者のうち約4割は期末試験だけでは不可のところをレポートで補って単位を取得できましたが、2割はレポートを出したにもかかわらず不可でした。成績や単位との関係ではレポートはあくまで補助手段にすぎず一保険が事故(=不可)を防いでくれるのではなく一、万能の妙薬ではありません。残りの4割は提出しなくても期末試験だけで単位は取れています。レポートを書いたことによってはるかに理解が深まり、評価も上がっています。レポートは加点効果よりも、自習や答案練習の効果の方がはるかに大きいと心得てください。殊に、自分で関心のあるテーマを見つけ、その分野のものを読み、調べ、考え、問い(課題)を設定して、答えに到る過程を辿ることは、自立した問題発見=解決能力を養う上で決定的に重要な訓練となるでしょう。

IV レポートの作成・提出・返却

レポートを書こうと思ったら、まずは、必ず別紙「レポートの作成について」(<http://www.onozukat.e.u-tokyo.ac.jp/Report.pdf>)を読み、そこに示した要件を満たすように努力してください。殊に、①全体の構成を明示する目次を書くこと、②3点以上の文献を参照することが大切です。なお文献名の表記は、本講義の参考文献リスト(http://www.onozukat.e.u-tokyo.ac.jp/EH_readinglist2014.pdf)のように、著・編者名『書名 主題 一副題一』(発行元、刊行年)としてください。これが社会科学分野での標準的な文献表記法です。欧文については「レポートの作成について」に紹介してある案内書を参照してください。なお、本講義指定のレポート表紙(<http://www.onozukat.e.u-tokyo.ac.jp/Reportcover.pdf>, <http://www.onozukat.e.u-tokyo.ac.jp/Reportcover.rtf>)を付していないものは受け付けません。

講義に関連して質問があるとか、あることがらについてさらに知りたいとか、何か本を読みたいなどの場合は個別に相談してください(質問と相談の仕方は「**経済史シラバスと若干の注意**」2014年10月9日Ⅲ質問と相談を参照)。殊にレポートを作成してみようと思った時は、テーマも不案内でしょうし、参考文献リストに含まれていないものも読む必要があるので事前に相談することが望ましいです。レポート作成中に行き詰まったり、どうしてもわからないことが出てきたという場合も相談に応じます。

レポート提出の期限は特に設けないので随時提出してください。加点効果を期待しないなら期末試験以後でも構いませんが、今年度内にしてください。

提出されたレポートは通常1~2週間後に口頭でコメントして返却しますので、提出する時に返却日時を確認してください。書き放しでは個別的に指導する意味がなくなるし、返せないと研究室に溜まってしまうので、提出したレポートはかならず受け取りにくることが肝要です。コメントして返すのに10~15分ほど要しますので、返却の際はご足労ですが研究室まで来てください。